



羊楼洞。保存されている古い街並み。

激走！中国鉄道縦断の旅②

150年前にロシア人が建てた茶工場を探す

鉄道の旅と言いながら、鉄道に乗るに至らなかった前回。今回は極寒の雲南省大理、昆明から湖南省長沙を経由して、三国志最大の名場面、赤壁の戦いの赤壁駅まで進む。ここまで3日、シャワーも浴びずに30時間、厳しい旅は続いていく。

文・写真／須賀 努



須賀 努(すが つとむ)

1961年東京生まれ。東京外国語大学中国語学科卒。コラムニスト/アジアンウォッチャー。金融機関で上海留学1年、台湾出向2年、香港9年、北京5年の駐在経験あり。現在はアジア各地をぼつつき歩き、コラム執筆。お茶をキーワードにした「茶旅」も敢行。

極寒の昆明から長沙まで
午後9時半、定刻に列車は大理を出発した。硬臥は三段ベットであるが、その真ん中が割り当てられていた。下のベットには寝るとき以外は、他の客も座っている。通路には折り畳み椅子？が完備されており、そこに座る人間もいる。同行者2名は、売店で買いこんだ酒とつまみを取り出してちびりちびりと始めている。隣では夫婦が差し向かいで、茶を飲んでいた。何の茶か気になって覗き込むと、奥さんが「飲むか」と言いながら茶葉を分けてくれた。その茶葉はプーアル茶であり、かなり品質の良いものだった。どうやら彼らは茶を商っているらしい。それを飲むと電気が消え、就寝となった。だが寝たと思った瞬間に叩き起こされた。僅か7時間の乗車時間、我々は早朝4時に昆明駅に放り出されてしまった。

まだ夜が明けていない昆明駅。わずか2日前の夜中2時にもここに立っていた。こんな旅をする日本人は我々以外に絶対いないと確信を持ったが、そんなことは何の役にも立たない。何しろ寒いのだ。湯気が上がっている店があつたので走り込んだが、何とドアなどないオーブンスペース。粥をすすり終ると、体が冷えてくるという恐ろしい状況だった。普通ならここで1泊して体を温めるべきなのだが、この旅はそんなに甘くない。既に前夜大理駅で昆明から長沙までの切符も買われてしまっており、その出発は11時半。7時間をこの極寒の地で過さなければならなかった。

粥を食って外に出たがまだ夜は開けていない。その中で、屋台を引いたおばさんたちが、この寒さの中でまんとうなどを売っている。

理から昆明を経由してようやくたどり着いた長沙はあまりにも短く、また万里茶路を訪ねる旅としては、正直こんなことでよいのかと思ってしまう。しかしすでに賽は投げられた、切符は買われてしまったのだ。その与えられた時間の中でベストを尽くす?!と言っても朝からどうするのか。ここにはWiFiすらなく、検索すらできない。と思っていたところ、駅前に入った店で辛うじてネットが繋がっており、長沙にある茶葉市場の場所を知ることができた。

駅からは少し離れていたが、こんな朝早くから開いている店もないので、ふらふらと雨上がりの街を歩いていく。駅近くは意外と昔の家や店が残っており、老人や子供がボーッとあたりに座っていた。30年前の中国旅を思い出し、しばし感慨にふける。今回の旅はまるで30年前にタイムスリップした気分だった。

午前9時台に神農茶都という、この街で一番大きい茶葉市場に着いた。だが案の定、まだ閉まっている店が多い。しかも市場自体が改修中

中国とはなんと厳しい世界なのだろうか。北京や上海には金持ちが溢れ、不動産価格は東京より遥かに高くなっているという事実もあるのに、一方で貧しい人はいつまでも貧しい。これで暴動が起らないのはなぜか、どうしても理解できない。ある学者は「中国とは古来そういう場所。搾取されるものは常に搾取される」と言い、諦めがあるらしい。それにしても厳しい現実。我々はその現実を受け入れることはできずに、更に放浪を続け、何とかファーストフード店に逃げ込んだ。

だがここでインスタントコーヒーを飲んでみると、明るくなった外からほとんどお客が入ってきて、肩身が狭くなり、ついにはなんとなく追いつかされてしまう。仕方が無くなり、駅に戻る。駅では身分証と荷物の検査があり、誰でも入れるわけではない。駅ビルにも別のファーストフード店があり、こちらは空いていたので、ここで初めて安堵の朝を迎えた。それから半分眠りながら時間を過ごし、駅構内に戻り、食料などを買い込む。駅には充電コーナーもあるので、携帯の充電などもこちらで行う。

11時半、列車に乗り込む。相変わらず、乗車口は大混雑で、割り込みは普通。もう慣れたので抵抗もせず、淡々と進む。この列車、意外にも北京行だった。今回の目的地、長沙までも気が遠くなるのに、北京までとは一体何日かかるのだろうか。また三段ベット、昨晩もよく寝ていない上に体が冷えたので、体力を消耗しており、すぐに寝入る。しかし1時間もすると、昼めし。駅弁売りの女性がワゴンを引いてやってくる。見ると弁当が30元、一度は食べてみようと思ったが、同行者から「向こうまで行って戻るのが待とう」と言われ、不審に思っ

ていると、戻ってきた時は、何と値段が20元以下がっていた。これぞ、旅のテクニック。
昆明から貴陽などを通過、何をしてもなく、一晩を列車内で過ごした。皆が寝ている姿を見て唯一思ったことは「中国人は太ったな」ということ。30年前、まだ経済が発展していなかった頃は、寝台のベッドからはみ出している人など殆どいなかった。だが今は、恐ろしいほどはみ出している中年男性が多い。これが豊かになったということだろうか。そんなことを考えてみたが、疲れてくるとうでもよくなり、早々に寝入ると朝が来て、長沙に着いてしまった。中国の鉄道の良いところは寝台だと、車掌が切符を預かり、下車駅前で起こしてくれることだろう。寝過ごすことがないというのは心理的にはとても有り難い。列車は定刻通り、朝7時には長沙駅に入った。乗車時間は20時間！

長沙でも泊まらず、茶葉市場へ

ここで1泊、と思うのは、人情というものだろう。だが我々の旅のルーティーンは「まずは到着駅で次の目的地の切符を買う」だった。これは30年前の中国の旅では常識だったが、当時は切符が簡単に買えなかったからである。今やネット予約さえできる時代に敢えてこれをやる意味は「柔軟性の高い旅」を行うこと以外にはない。長沙でも駅で並び、何と午後6時の赤壁行のチケットを手に入れてしまう。しかも今回は硬座(普通座席)、3時間とはいえ、かなり厳しい旅が予想される。

列車に乗るまでの数時間、それが我々の長沙滞在時間だった。昆明から瑞麗、そして大



昆明。極寒の早朝にまんとうを売るおばさん。

ここはいい工場だったが我々の目的地は違うんだよな、もっと古いんだよな、と思いがら後ろを振り返ると、そこには確かに古い工場が見えた。瞬時にここだ、と叫んだ。実はCCTVの番組でこの場所を見たのが唯一の拠り所だったのだが、その建物が目の前に現

小1時間で着いたところは、田舎の農村地帯。こんなところに工場があるのかと思っていると、かなり古びた建物があり、看板を見ると『松峰知青茶廠』となっていた。知青、と見ればピンと来る。ここは文化大革命時代に学生が下放され、労働させられた場所だった。中に入ると実にいい感じに古びており、撮影スポットとして最適だった。建物の中には当時下放された学生が50年経って懐かしさから、この地を再訪し、写真を展示したりしていた。

翌朝、駅前でタクシーを拾う。ここ赤壁を訪れた人なら誰でも赤壁の古戦場へ行くだろう。運ちゃんもそう思って乗せたはずである。だが我々の目的地はここから30kmほどのところにある『羊楼洞』だった。『羊楼洞はどこへ？』と運ちゃんが聞いたので、『150年前にロシア人が建てた茶工場へ』と返すと、運ちゃんがひっくり返りそうになり、『なんだそれ？ 知らねえよー』と小声になる。我々もその工場がどこにあるのか、住所もなければ名前も知らないのだから、指図も出来ない。『じゃあ、取り敢えずあなたの知っている茶工場でいいよ』という、怪訝そうにしながらも車を走らせた。

の戦いで有名な場所である。だが、駅前は何とも寂しい限り。それでもホテルを見付けて投宿何と3日ぶりにシャワーを浴び、揺れないベッドで眠ることができた。至福の時間だった。

午後はお茶の茶葉市場を探しに行く。だがきちんとした地図も持たずに歩いているのでなかなか見つからない。ようやく見つけたその市場も、店の数は300軒もあり、どこに入ったら良いか皆目見当がつかない。午前中は黒茶を飲んだので、午後は紅茶にしようと思つ。実は湖南省の安化は黒茶だけでなく、昔は有名な紅茶産地だったのだ。近年その紅茶が復活してきており、注目されていた。だが紅茶を売っている店はなかなかない。

2軒ほどはしこして、店の人に教えてもらった湖南料理のレストランでランチ。茶葉市場の良いところは、お茶だけでなく様々な情報飛び交うこと。ランチ情報もすぐに出てくるから助かる。辛くはないと言いつつも、そこは湖南料理。寒さには絶妙な辛さで体が温まる。日本人は中国で一番辛い料理は四川料理だと思つているが、実は湖南料理の方が辛いというのが定説！

紅茶があると書かれていた。店主に紅茶を、と言つと、急に喜びだして試飲させてくれた。安化紅茶の歴史について話していると、写真を見せてくれた。そこにはロシア人が写っているではないか。最近ロシア人が湖南省までお茶の調査に来ているらしい。是非彼らを紹介して欲しいと言つと、『それならモスクワにいる茶商を紹介しよう』と言つてくれた。この出会いが後にモスクワで役に立つのである。更にはこの店主鄧さんは、筆者が4年前の反日暴動直後に訪れた安化の茶工場の女性社長鄧さんの親戚だった。これには二人とも驚いてしまい、茶の緑の強さを感じてしまう。今回は安化をゆっくり再訪しようと思つて、長沙を後にした。

羊楼洞の街は今や寂れているが、往時は各国商人が集い、茶荘や銭荘など、茶貿易に従事する者が多くいた。現在も観光用として古い街並みは保存されている。そして帰りはバスで戻りたいという我儘で寄った街には既に廃止された駅の建物が残っていた。趙李橋と呼ばれるその場所には、現在でも湖北省最大の茶工場がある。そこは広い面積で残されており、内モンゴル向けの青せん茶を作っている。100年に開通したこの鉄道、我々が長沙から乗ってきた線を通じて、茶葉が武漢と広東に流れていた。これもまた歴史である。

それにしてなぜこんなところに、しかも150年も前にロシア人がやってきて、茶工場を建てたのか。それは中国近代史を見なければならぬ。アヘン戦争、それに続く第二次アヘン戦争に敗れた清国は、それまで抑えてきた欧米列強の中国国内での貿易を押し返さねなくなり、上海など港も開港していた。その中に内陸部で唯一開港されたのが漢口(武漢の1つの街)、当時の戦略物資であった茶貿易の中心の1つだった。茶畑を持たないロシア人はここを拠点に、実際に中国人を出し抜いて茶葉を押さえるべく、茶産地である羊楼洞まで来たというわけだ。

列車はあの屈原が身を投げ、粽の由来にもなった汨羅、岳陽楼で名高い岳陽など、歴史好きには堪らない地名を駅に停まってく。それに伴い人が降りて行き、車内が空いてきた。そして3時間後、暗くなりかけた頃、目的地赤壁に到着した。あの三国志最大の名場面、赤壁

れたのだから喜んだ。だがそこへ行ってみても名称もないし、鍵が掛かっており、中にも入れない。辛うじて覗き込むと、そこには製茶道具があり、確かにここが茶工場だったことは分かった。念のために近所の老人に訪ねると『生まれてないから知らない』と素っ気なかったが『爺さんからロシア人が建てたと聞いたことはある』との証言を引き出した。これでこの地を訪れた目的は呆気なく終了した。

硬座は硬臥と違い、常に込み合っている。長沙駅で乗った列車は満員であり、30年前の中国が蘇る感じがする。指定席なのにそこに座り込んで動かない老人、そして老人だからと無理に排除しない中年男。大量の荷物を持ちこみ、網棚に上げるのが大変だからと通行の邪魔をしまくる若い女性。何となく阿鼻叫喚？の様相になるが、列車が発発すると、以前とは異なり、皆が静かになっていく。スマホをいじっている人が大半なのだ。あの居座り老人すら持っている。これもまた豊かさの象徴だろうか。

赤壁で

長沙

羊楼洞



昆明-長沙。駅弁を食す。



長沙。茶葉市場でご縁に出会う。



羊楼洞。150年前にロシア人が建てた茶工場。



長沙-赤壁。込み合う硬座車両。